

## スノーシューの遊び方

2014年1月29日、キタヨコという愛称で人気のある、北八ヶ岳の横岳に登ってきた。無風快晴、絶好の登山日和であった。

ロープウェイで上がり、外に出てアイゼンを着けていると、向こう側では4人がスノーシューを履いていた。履き終わると2人は坪庭へのトレースに入り、別の2人は縞枯山荘に向かった。どちらもしっかり踏み固められたトレースで、1cmも潜らない。スノーシューの必要性はゼロ。不必要なのになんで履くのだろう？ それと承知して敢えて履くのなら心配ないのだが、スノーシューという道具の目的や遊び方が分かっていないような気がしてならない。

業界はマーケットに対して様々なことを仕掛けてくる。二十数年前、クロスカントリースキーが持ち込まれた。ぼくはすぐ飛びついた。鶴見にあった登山用品専門店とタイアップして、入門教室を企画した。すぐ満席になった。このスキーはクロスカントリーが目的だからか、細身でエッジがなく、ヒールフリーのビンディング、靴は運動靴レベルの軽快なもので、アルペンスキーに比べて取り付き易い、と誰もが考えたのだろう。しかし、実際履いてみると、真っ平らのところはスイスイ行けて楽しいのだが、下り坂になると細身、ヒールフリー、エッジがないのでコントロールが難しく、すぐころぶ。いつしか登山者には敬遠されていった。

次に登場したのがスノーシューである。わが国にはワカンという道具があるが、どちらも深雪対策の道具である。登山靴のみで踏み込むと腰まで潜るような深雪でも、スノーシューを履いていれば雪質にもよるが、膝くらいの潜りで済む。ワカンの場合は、スノーシューよりサイズが小さいのと構造の違いがあって、スノーシューよりは潜る。ともあれ、トレースのない深雪の中を歩き回るのにスノーシューは格好の道具である。

前述の彼らは、そのことを知らないようなのだ。なぜか？ 彼らの情報源がインターネットであり、新聞・雑誌、テレビといったマスコミ情報で、一方通行の情報だからだ、というのがぼくの推論だ。「スノーシューはいて深雪の中、歩いてみよう」という言葉が、「スノーシューはいて歩いてみよう」に変わっている。一方通行の情報では、チェックのしようもない。もし情報の入手がフェイス・ツー・フェイスに依っていたら、深雪が消えることはなかったと思う。「深雪の中を歩くのが楽しい」はずが、いつのまにか「スノーシューを履いて歩くのが楽しい」に変わっている。インターネット情報の問題点がここにある。

玉原・鹿俣山の麓にブナ平と呼ばれる素敵なブナ林がある。スノーシューがブームとなる以前、ここでスノーシューハイキングを楽しんだ。雪に埋もれたブナ林、だれの足跡もない。その中に踏み込むことの爽快・痛快。スノーシューハイキングの醍醐味、ここに極まれりであった。